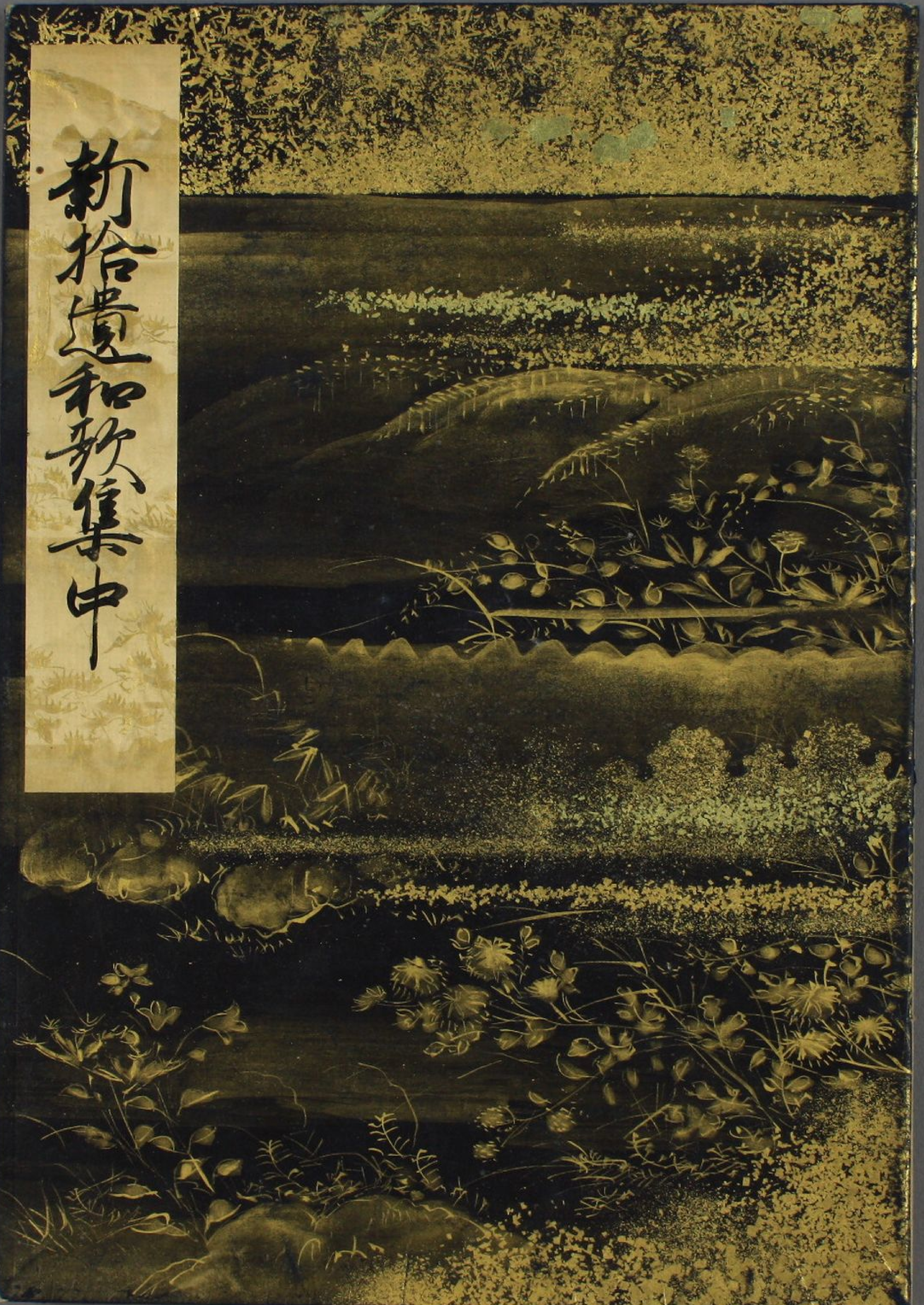
新拾遺和歌集　中



九曙文庫

新拾遺和歌集巻第七

賀哥

左大臣乃作保乃家にみゆきせさせ給ひて
御時　　元正天皇御製
もゝ薦おふなるのゆきさへ〳〵ふりてつもれる宿は万代よ

長元四年九月上東門院住吉社にまう
でさせ給ひけるとき人〳〵哥よみ侍け
るに　　法成寺入道前摂政太政大臣
君か代はなかゝれ橋の神よりかきさひまさる住吉の松

建久二年やそしまのまつりに住吉に渉
りてよみ侍ける　　西園寺入道太政大臣
君か代はやそしまかくる波の音に風しつかなり住吉の松

弘安八年住吉に御幸ありて社頭述懐と
いふことをよませられ侍けるにつかうまつる
津守国助
神代より松生の松をきみかためちよをそへて千年のちきりを知らめ

松延齢友といふことをよみ侍ける
権大納言公明
としふれはなにか玉松のえたやしくる千代を君かよはひにちきるなる

暦応二年六月仙洞にて松陰映池といふことを

等持院贈左大臣

風よふ松もろともて池なれは波もちとせのこゑやよろこひん

弘安八年三月従一位貞子に九十賀たまはせける時詠侍ける　為道朝臣

かきりなきよはひを君かためしにて千世の初春まつそみるへき

亀山院の御時めしやまと歌奉りて花契遐年といふことを講せられけるに　後嵯峨院大納言典侍

咲花もときはにさかふ御代なれは秋まて移ろ来も万代やへん

中院前内大臣

万代の君かかさしにをりそへて光そへたる山桜花

二品覚性法親王に八重桜をそへてつかはしける　法橋顕昭

君かへん千世をかさねて八重桜かさしにをりてそへてみるかな

返し　二品法親王覚性

千世ふへき君かかさしにをりけれは八重の桜もかさねてそさく

元久二年三月高陽院殿にて庭花久しといふ事を　前中納言定家

かへりての年ふるとせの春なれはとをみかさぬる花のみかきそ

元徳二年中殿にて花契万春といふことを

講せられしに　今出河入道前太政大臣

君かためひきうへつる姫にはひくもゝちとせやすむ万代やん

文和五年二月松有佳色といふことを講せられけり　前参議為秀（季イ）

君のみやちとせ春の花の色に十かへりまてもあひ見えますらん

康永三年後二月仙洞にて　松遐年友といふことを講せしめけり

照光院前関白右大臣

千とせともかきらぬ君かともなれは松も花咲春やきけん

入道前内大臣

色かへぬときはの山の巌の松君そ千代の友と見るらん

前大納言経顕

もろさにつゝ友とや君に契るらん十かへり松の花のかけまて

前大納言公蔭

松かえも八百万代の色そへぬ千とせもかねて我君か代に

前大納言忠季

行末をとふもひきし姫小松今より君か千世を契りて

貞治二年二月春松久縁といふことを

前参議実名

君かへん千とせの春の行末も松のみとりにかそへみゆらし

藤原雅家朝臣

いく千世そ緑をそへておひおひむ松と君との行末の空

三十首哥めされし次に

花園院御製

ふくかせの八千代の松に吹風は万代よふと声そきこゆる聞しらす

左兵衛督基氏

鶴の思ふ君かためとき松を吹風の雲井によふ千代数

文保百首哥たてまつりし時

前大納言俊光

君かよむたゝや山の玉椿やちよに限りもそなき

百首哥めされし時祝言

御製

代をおさめ民をはくゝむ陽ことわりは神よりつたへ来しを

等持院贈左大臣

思ふ事なくつかふるも我君の御代そおさまる始なりける

正中百首哥めされけるついてに

後醍醐院御製

よもの海おさまりぬらし我国のやまとしまねの小波も立

建仁三年十一月和哥所にて九十賀たまはりける時詠てまつりける

りをよちはくへんそおもふ万代にへさ君かみよには

皇太后宮大夫俊成

わか浦によるしら波をかそへてそ千代をは君かよはひとはせん

正三位經家

おなしき時御まいらせける法服のけさのそきりのまへにつけられたりけるに

ならしへてけさやひきこし老の波やちよをかけて君にくはへよ

後鳥羽院御製

このうたを叡覧せさせ給てめてさせ給てまつりてよもすから見給てなくなくぬみちの面

同しくおほえけるあまりにとめて

申つかはしける

建礼門院右京大夫

君そ猶けふよりもかそふへき九かへりの十のゆくすゑ

返し

皇太后宮大夫俊成

亀山乃こゝのかへりの千とせをも君かみよにそ添ゆつるへき

建保二年大井川行幸の日よめる

式部卿敦實親王

大井川みゆきやまちし亀山のちよふりけり見る御幸とそ

建保六年中殿にて池月久明といふことを講せられけるに

衣笠前内大臣

君か代ハのとかにすめる池のおもに千とせを契る秋の月かけ

従二位家隆

影清き池の鏡にてる月をくもらぬ時そ万代や経ん

信實朝臣

あきらけき見るけふになるゝ池水を月にそみつる万代の秋

建保二年九月月契千秋といふ事を

前中納言定家

君か代の月と秋とのはかりなきすゑにかそへん萬代の白露

東三條院石山にまうしておはしましけるに秋の夜月日人々うたよみしとふ所に

くりてゝりそふこしくこゝみ待きつるに

権大納言行成

君か代を千とせとおもふ事秋ことにまたこそ萬代をかそふへき

後宇多院御楽の比昭慶門院に御幸ありて

てん枝にすゝめへきよしおほせられけれ

はよめる

前大納言実教

雨露のめくみにそむる紅葉のちしほハ君か千世の数を

元弘三年立后屏風に

後宇多院宰相典侍

咲初の籬に菊の露なれし千世をうつさん影そ久しき

崇徳院位におりゐし給ひし時法金剛院に
行幸ありて菊契千秋といふことをよませ給
ひけるに　三条内大臣

君か代の数にくらへはなにならす菊はいくよをかさねてもへ

百首奉りし時庭竹

前関白太政大臣 九条

宮の庭にみとりならへて行末とまもる千代の呉竹

正和五年内裏造営ありし竹台の呉竹を
移しうへられしとて奉りし時

後照念院前関白太政大臣

幾世ともみかきの竹の色をかさね末は千とせの色そかはらさき

延文四年庭上鶴といふことをよませられ侍し

内大臣

おさまれる雲ゐの庭に遊ひせむと老しる鶴の何思ふらん

人の子をうませ給ひけるにうふきぬをぬひてまゐらすとて

弁乳母

鶴の子はなをそちよしもろもろは千代は八千世と重てそみん

祝の心を

源師光

ひろ田にちとせをこめてすむ鶴も君か齢にしかしとそ思

十二月つこもりかたに藤原基俊の子法師

とふのりとにのりいくみなかすとそいひつたへける

権僧正永縁

年をへてゆきさえます鏡千代のかけをは君そみるへき

返し

基俊

万代に万世そへて御かゝ鏡君かみかけにならへてそみん

百首歌たてまつりし時祝歌

権大納言義詮

我君は人をそみと見るゝ山のりて千代もはるらん

花しらす

法印定淵

わか代は満よ二らひ玉をみつくらあさて世々代の臣家

貞和百首歌たてまつりし時

入道二品親王法守

あめつちのかきりもしらし恵の露の花あふ代にあまつゝ道き

嘉元百首歌たてまつりける時

津守国冬

我君はいまのえらひをそへて民の七世の末にまて

洞院摂政家百首歌に祝

源有長朝臣

君か代はとよ河原のあさみとにみちのひとつのつきとそ思

後二条院御時大嘗会備中国哥

藤原経衡

ちよふるも今行末をおもふにはいさなからを村の長きためしに

堀河院御時大嘗会近江国方

前中納言匡房

見わたしの山岩ねよりかつ榊葉のもろへをせよて万世やへん

高倉院御時大嘗会備中国方

清輔朝臣

くもりなき玉をみかける鏡への玉日をさゝすやとみゆるかな

おなしこの屏風り

ちかくともみるにあさしとそゝみゆや月てらすさしかねのまの
約舟

今上御時大嘗会屏風り

権中納言時光

時をえてちよの村人いくちよもおひとれ九つきぬ千苗なかん

文保百首歌奉りける時

前大納言為定

敷嶋のみちを今こそ伝へ人万代とまそぬ君かめくみに

新拾遺和歌集巻第八

離別歌

遠きところへまかりける人に

衣笠前内大臣

立かへり何とたのむもかはらねは人よ別やはとゝむ

藤原光俊朝臣あつまよりのほりける時

中務卿宗尊親王

みとせまてなれしはへるは世あて別のおきさりまた

あつま人よりつらかりけり

藤原隆信朝臣

東路の野原忍のつゆゆくは忘ん波をとひはこせよ

堀川院御時百首歌に別を

藤原仲実朝臣

とゆる人を惜も何ぬ別路は去てふんやせさもみん

京極関白家肥後

別路は世さもとゝめぬ涙川流の名をたのむかと

思しらす

大納言成通

今まてもさきなき世と知らん行人目をも待そてるふ

大原桜井を住よ給ける時のつり

乃為まりふりと参し給ける返事に

聖武天皇御製

おうの浦のえ見渡ふよる波の中まて若なきこの

越中守にて侍りけるか少納言になりて其

のぼり侍りける時主の館にて餞し侍りけれは

中納言家持

岩瀬野の秋萩しのき駒なへて小鷹狩たにせてやわかれん

在原治方豊後守になりてくたり侍りけるに

餞し侍らんとて呼ひ侍りけれとまうて

こさりけれはいひつかはしける

権中納言兼輔

こゑ人まつ屏風のゑに我おもふ猿ちすら

成為法師かもろこしにまかりける時よみ侍

ける

成為法師

ゆきて人はひとゝまりてかなしきは我をまちまたむ

年をへて待人は秋をそ待とすゝめてさきよ

やけましは

権僧正道我

かきりある命なりせはめくりあはん旅も世をへて契らさらまし

人をとむらひて難波の月見によみて暁

のぼりけるに前中納言実任家にて志中

かみくもの別によみけるは生きてひける時

難河波の上に月をのこして難波江乃蘆に
小舟こきやわたらんと申けるに
前大納言為世
漕出る蘆まに小舟なとゝ又なみをとゝめて残る歟
前大納言実教
波の上に月ならすは難波江の蘆まに小舟ややさゝらん
大峯乃吹こしといふ宿にとまりあひありけり
けり山桜ほのさきてたちそれし
大僧正行尊
又いつとおもひおくともさためてる露のきえ月をとまらん

与君後会知何日といふことを
土御門院御製
身のゆくへあすは命もしらなくにかねて物うき
別ろんと
前大僧正実伊
たのますよこれはおなし世の別とも又あふまての命しらねは
前大納言為家
めくみえぬ人のつりは花とまたねと独や山をとふにゆかん
道因法師みちのくにまかりける時
別をしみて人々よみ侍けるに
俊恵法師

花とみよ庭しろたへにさく来とりてうちむかふなりけそ

都うつりの比後徳大寺左大臣右近衛大将
にまゐりて女房の中にふるきみやこの月
を見てかへりなとして暁かへる時小侍従
をくりていそ侍けるにとりのなくまてよみ侍ける

藤原経尹

物かはと君かいひけん鳥の音のけさしもなとかかなしかるらん

参議為恵義法親王より歌よみの侍ける時

源頼康

よまれ

庭つよ立へつることも紛人のこゝろはとめよ梅のにほひよせきりつゝ

題しらず

藤原基俊

春くれと萬の花のすゑおとろへまは身もかひなき

藤原京経あつまにまかりくたり侍ける時

みやの宿へ侍りし侍けり

前大納言為世

ともしらぬこゝろふかくもみよかへりみむ山里のことはなくとも

新拾遺和歌集巻第九

羇旅哥

題しらす　よみ人不知

こゝにても雲やいつこに白雲のかゝる山ちをこえてそ行

人丸

玉もかるあまのまくらもそて夜半に鶴なくなるさに舟ちかつらし

亭子院なかはよみゆきせしをたまふける時

よみ侍ける　貞数親王

君かため波の玉しく浜ゆきさるをしほりてもみん

題不知　よみ人しらす

逢坂をこえてそこれおしてるの海ちゆく末に波たつらん

千五百番歌合に　大納言通具

とまりするたなゝの磯の波枕さらふめよはのあらし風

旅泊　中納言為藤

世をうくる波の枕よはのまそて山のはをしらぬ月をみるらん

羇旅の心を　如願法師

まくの原やその鴫をてまらするせよりに通ふおきつ物舟

皇太后宮大夫俊成

なみさ川ほそてふりの葦に浪とそよふる都そりの秋

百首歌めされし次に羇旅

つきもなくちきりしかりすみた川しらぬ岡へのなみそこえて

羇中暮といふことを

前大納言忠良

草むすふ旅ねの床は秋の袖露やはらはむすゝめ嵐に

猿のこゑを

今出河院近衛

行末もあはれなりけり山の峯の猿の声をきゝてそおもひ知りぬる

永仁元年八月十五夜鳥羽殿にて十首歌よませ給ひしに秋猿といふことを

前大納言為兼

夜ふかくそこそきくらんいくせ猿松の秋のよの松風

為道朝臣

秋の夜をかなしき猿松の峯わたる嵐や小鹿のこゑにそふらん

百首歌たてまつりし時羇旅

権大納言公義

大江山越ゆく末も遠けれは衣に露のおきそはりけん

羇中野といふことをよませ給ける

伏見院御製

露ふかき野への小篠の枕結ひたれかは夢をむすふらん

前参議為秀

いまそしる草の枕の白露のおくとはいそぬれぬとは見ん

藤原宗秀

東路の露にぬれしも秋はいまかさねてや草に枕むすはん

元亨二年亀山殿にて題をさくりて哥

つかうまつりけるに旅行

前中納言有忠

越えては都にとほく逢坂の関にゆふつけ鳥の声をきけ

聞しらす

按察使資明

宮の戸もやゝあけかたの鳥の声におとろかされていそく旅人

中園入道前太政大臣家にて旅行といふ

ことを

頓阿法師

逢坂の鳥の音とをく越ゆるかな朝霧よりもあけの関路は

野旅

権中納言宗経

旅にまた露けき野路のかりねせん結ひすてつる草の枕に

五十首哥の中に羈中といふ事を

よませ給ひける

後醍醐院御製

わきてこよひ旅の枕に有りしよもひとつそ旅の空哉

守覚法親王家五十首哥に旅

大蔵卿有家

猿もなくあらしふく猿なきふかき山の嵐のおとり

猿声に　藤原為季

分けと花の子猿のこゑも遠く秋とりまさるむさしの原
あつまちへ陰らし給はに白河の関そ
月の何てはつきけしいらしらふかきさつきの内

西行法師

白川の関屋を月のもるかけハ人の心をとむるなりけり

元亨元年八月十五夜内裏にて歌合に関月

丹波忠守朝臣

こよひこそ月にこえぬれ秋風の音にのみきく白川の関

羇猿

後九条内大臣

秋風はきのふ白川の関こえてこふもとまとし鹿の音やま
あつまへくたりける時よめる

祝部成茂

何となくたちゆく月に関こえて鳴猿の袖に露そおきける

夕猿

善了法師

行末ハ月やこえなん猿なく日も夕暮れさやの中山

兼好法師

猿のなく夕暮に鳴出て山のはらの月をみるらん

前中納言為相

旅人はまた出やらぬ空のまに月そはさきたつ在明の空

後光明峯寺前摂政左大臣

我やらぬ人もやすらふ旅ねして在明の月にのみのこるらん

菅原氏忠

帰りさて誰かはこえん足引の山雲居に横に月を待る

中納言家持

旅人のよそにかりかせ山こえて月をもちて来別たるらん

旅の中に

後鳥羽院御製

行ねるに都をこえ東路に出むその月はなれぬ人の行なれ

伏見院御製

松に吹嵐の枕夜はこえて旅寝わけ山に月そうつる

元久元年七月宇治御幸の時五首歌のうち

六条入道前太政大臣

いかにせん菜山のかけのやとりねの草の枕になさはさとの夢

和哥所六首歌合に旅月寛麻

宜秋門院丹後

松かねの枕にしつの露わけて末なかの月を袖にみるかな

題しらす

源頼貞

都にて秋風さむし旅の空ふしいりやあかさん

寛治百首哥なり

正三位知家

こよひもや山の嵐の松風にさゝ葉かたしき独かもねん

題不知

法印長舜

旅枕よるの夜をとへさすら露にもぬるゝ袖猿のまし

源業氏

草枕露ちりしぬそのまゝに涙しく猿の夜半

羇中猿

前大僧正実超

旅ねするかりふのちハゆめさそふ猿の鳴音のよハの嵐か

猿の心を

左京大夫顕輔

草枕袖のミぬるゝ猿の音をひとりきゝてそくやしき

あつまにくたりける時やとまりける家まれ
とこハなくて女のありときゝてよひに
侍ける

源仲正

我はゆめ猿ねの床の旅ひさへいふにたらぬもとめし

返し

よみ人しらす

あひおもハぬ我も夜とこもさひしくて旅ハやまよハいとゝさひしさ

白川殿七百首歌に猿宿時雨

前大納言為家

かゝ夜はしくれきける猿ねハ露も袖ぬらせとや又しくるらん

羇猿秋と

権大納言為氏

里まさに山ちる雲はしくれて夕日かけそく秋の遠人

冬猿　　卜部兼直

時雨行雲とともに山よりなほそ先に越行なり関

前にたてまつる　二品法親王兼覚

やまてらの猿そつりんふる雪にさひてやこゑも深き山みち

寂真法師

かりの日は猿そなけりけんとや雪もはけやの中山

猿歳暮を　大蔵卿隆将

ゆくはるは年さへくれぬ東路やすまてこえし白川の関

題しらす　前大納言為家

猿なくさけひて八橋の昔のあとしに袖をぬらして

道助法親王家五十首歌猿春雨

源家長朝臣

宿とふ人のまくらにさゆるさやはぬれてもゆく人春霞

題しらす　よみ人しらす

谷のおとにやとしふけましは猿の声をききなれてこそゆく

源季賢

ゆきさむみ夜やまよふの宿とひくなかなかなる遠からはしけれ

前大納言為世よませ給し春日社三十首

歌中に

法印公順

きふかきこゑにむねまつしさやかに見ゆる峯の白雲

百首うたてまつりし時羇猿

右大臣

夜をとてそそてふかくり猿なくさかなる山の八重の白雲

道助法親王家五十首哥に山猿

参議雅経

立のほりやまかけ嶺の雲ゐともさそふねよりの声よ
猿のこゑをともなひせ給けり

花園院御製

みねちかきゆふこえくまて宿りぬ雲かゝる嶺にこゑはそなへん

入道二品親王尊円

都とふ人の山路はこえすともかよふとたえなきまにはよ
あつまりのなけけるみちにて

法印定円

霧ふかきこゝろの夜をともかえて暮にふかきゆふ風に
阿の中山をこえ給けるに猿のなく給
をれし

平兼時

暁とておりしの里はおほねましと鳴つきてさる神山
思しらす

性厳法師

いつくみつやとをりしほ岩ねふきさなる山よ日はきえにけり

洞院摂政家百首に

従二位家隆

許田山ゆふこえくれてあまのすむさとの風ゆりにふきやまさん

猿のなくを　祝部行親

漕出しみふねとつゝそ和田の原よそにの雲にまかふしら波

貞和二年百首歌奉りける時

後照念院前関白太政大臣

こく舟のゆくゑもしらぬ波まよりみゆる小島やとまりなるらん

元亨三年十月後宇多院に十首歌奉て

まつりけるに海邊旅といふことを

前大納言為定

和田の原おきこく舟のよるへなく風にまかせてゆくや誰まよはん

嘉元百首歌めされしついてに海旅を

いつくにか心をかよはむまたしらぬ原舟に風のなかれゆくらん

後宇多院御製

保延元年内裏歌合に海上遠望

大炊御門右大臣

見わたせは雲のそこまて波をきて海も空もわかれさりけり

猿のなくを

二品法親王守覚

夕しくれ麻乃浦風さむけはくもらぬさきの波の音哉

洞院摂政家百首歌に

前中納言定家

外のはまの浜松のしたの岩枕袖うちぬらしいくよなみかね

百首歌奉りける時

前内大臣　実

こともて我度るもあ友千鳥なかく破波のかれさらにふ

入道二品親王覚誉家五十首歌よみ侍り

権僧正果守

ゆく絶ぬ葛の葉そよく嵐風さむく吹よの波枕よ

嘉元百首歌たてまつりける時

贈従三位為子

月にそこむ行ところなくをまつ高まの塩枕波の上の浦風

二品法親王覚助家五十首歌に旅泊

藤原基任

うち枕いふさゝめて夢もみぬうきねにかなふ人まとつや

道助法親王家五十首歌に海旅

法印覚寛

衣手をさすさ川の浦風にうき枕波もしけぬまそなき

題しらす

平氏

うき枕むすふともそぬ夢路かりやそこにはつ浦浪

権大納言忠基

しひやまと別しうらあまれ袖にも波のかゝるおもふかな

従二位成清

かくてとはひさしおもへくき雲もあまになりゆく奥の舟人

法印源意

舟とめて返しく袖の浦風とたゆふに波の花そちりくる

二品法親王覚助家五十首哥合に旅宿

大江茂重

衣はそふ窓の泊の船嵐に夢をとかふにおきて出る舟人

見しらす

大江貞重

うらかなしおもふ破波の音まてもさかはいねぬ旅に袖そぬれける

大神家哥合に羇中月

源義氏朝臣

ゆくとるまて月とそこゝろ波のあらき浜への(?)まくらはなれ

法眼源兼

守を浦や月におはしく浜荻のかりねもさむし旅の秋風

従二位家隆

羇旅を

おりたつもまくらなけは奥の風ゆふる波の

ゆらき浜荻

新拾遺和歌集巻第十

哀傷哥

題しらず　　人丸

草の葉にをきゐる露の消ぬまは玉かとみゆることそはかなさ

日並皇子かくれ給ひける時よみ侍りける

久かたの天みることくあふきみしみこの御門のあれまくおしも

天智天皇かくれ給ひける時よめる　　額田王

かからんと兼て知りせはおほみ舟はてしとまりにしめゆはましを

題しらず　　貫之

藤衣なりし家にはこれやこの[illegible]

子にをくれ侍りてなけき侍りける比輔親かもとへ

つかはしける　　重之

この世にはかく露しなりとおもひ草ねをのみそなく

返し　　祭主輔親

ありそ海の別のねは思ふ事のまつはて露そこほる

三条院かくれ給ひける法事すゝみきけるに　　道命法師

足引の山のかなたの[illegible]

題しらず　　赤染衛門

いとたえかたくおほえけるに人よそへて数つかうまつりける
あふきといふ所へまかりける時開山とす
き侍りけるよいはれし文後者卿下のりたまひ
てしこと思ひそ車をとゝめてやすらひ
侍る時よめる　　新少将
なき人よ待ぬと思ひせはあえぬ涙はせきとめてまし
待賢門院かくれ給ひける御忌によこもりて
て九月尽日つかはしける
按察使公通
世中はうかりし秋と思ひへ大宮のゆくへはおしむやなみたなる

返し　　　　堀河
限なくきのふのくもそたちまよふ秋のなかれと思ふへは
契しらす　　前中納言定家
たにみなむなしき枕と立田川みちふかく秋をとゝめかね
鳥羽院かくれ給ひて御葬送の夜ある
野よりおりはてまつりけるにあひてよみ
侍りける　　西行法師
こよひこそ思ひしらるれあさからぬ君に契のある身なりけり
八条院かくれさせ給ひてのち雅なく文義記
門院うせ給ひを納めけると鳥羽へをくり

たてまつりけるによみ給ける

信實朝臣

うつしける影をしのひて山城のとはにあひ見し君をおもひける那

母のわすれりけるおもかけなくも月にそふらん

し給て

藤原秀茂

今はとてみし面影のはかなさを月にそふるもならひなりけり

なきくし給ける時によみ給ける

道家関白前左大臣

明暮は月をともにて面影のありてなきこそかなしかりけれ

浄土寺入道おほき大臣かくれ給てのちよめる

前大僧正公豪

時のまも忘られはせしなき人の面影さらぬ月のかけかな

信實朝臣身まかりて影をとゝめをきて侍りけるを

と月はかりてのち見侍てよめる

如円法師

思ひ出てみるもかなしき面影となりにし中のふかきえにしを

昭慶門院少将まかりける時人のもとへ

永陽門院左京大夫

やけり

影とも見えし人はなきあとに我身そとまるそてのなみたに

六条内大臣かくれてのち法事いとなみ給ける

時々つかはしける　前権僧正尊仲
ともすれはひとりそたちぬる山の端にふたはなるかの返さ
返し　　　中納言有忠
理の人のそてうちきる身にとゝまてとおもふきれい
花しらす　　源時女
志かてに世のならひとおもひなせ露あらひとなさけ
宗尊無常とよみ侍ける　達智門院兵衛督
世のうさもいつかわすれん歌よみてなきこゝろおもひなさすは
無常ととて　前大僧正慈鎮

世中はのかれにみつ善乃おもふくれと人称てもかつら
拇中堂の女のもとへいさめふよりて流らくの
みまさけるかふかの女房内々ねところて毋も
とへつかはしける　澄伝朝臣
君か為とおもひていそく俤つも身はうき世の中や歌よむ迄
かへり侍けるに有りきたりくにふく人のさかり
ふ侍る時をしもならけるのふわつらふん
おりふしある人何かは花とみをもとてあつけを紀
身のなしとつかはしけるにかきそてりけるか
今迄はおもひしよと契かたりてもかへさとめん紀の迄さ

これによりて母のゆるされありけり

かのひとりことゝもにていはせて後はしやとさねともそへる

伏見院位の御時花園院まだ位におはし

ましける時紅葉につけてたてまつらせ給ける

後伏見院御製

たちかへす神の恵にせきとめてこゝろしたかふもみちをそみれ

御返し

花園院御製

色ふかき神の恵にならはせてちしほやちしほそめしもみち葉

陽禄門院かくれ給ひて後人のとふらひ

侍りけるに

按察使実継

忍ひつゝなれしはゝそのたのむさへなほ雲の露そ

神無月の比法住寺にて母身まかりける時

しくれのふりけるによめる

安嘉門院大弐

つねよりもしくれてまさる墨染の袖もしくるゝ神無月かな

後一条入道前関白かくれ侍りし比雨のふり

ける日申つかはしける

前大納言雅言

雨とのみ涙とふりしころにさへことのはのなさけふかさ

返し

源邦長朝臣

かきくらす涙のふりにまよひては行かたもしらぬ秘
入道二品親王性助かくれ給ける又の日雨ふりと
ふり侍しに法眼源承につかはしける
法眼源兼
空は雨にも松かきくもりて世の間の袖とやいふらん
返し
法眼源承
ときいまに空もひとつに成てかなしきに涙もをやみなき
中園入道前太政大臣かくれ侍りて二七日に
てのちわかれし侍し時はまてなくもなかりしかれ
中に袖をたまへ侍しとおもひよめる

慶空上人
思ひやる我もぬれにし袖とのみおもひやれとも我袖の
おなし雨よりもぬれてとひけれ侍る
従二位為子
ゆふべ又雨ちかくしてとまりし袖のしほとけて
別しらす
前権僧正雲円
晴るといひし人を恨きめりし袖はきえぬ月の夜まて
僧正隆経
立のわか涙の袖やなき人の別ておくれぬる身かな
母のおもひにたけしかりける

法印経深

ぬるゝ雁をもまちて夜もすがら渡よくちやそらん
行慈法師
月残りてのち眠ねざめけり
時よも侍りつ
藤原行長

このまに思ひやあらんねさめつゝ人の袖も涙に墨染の袖
民部卿成信の母よしよみ侍りけるに月残り
て眠ねさめ侍りて
権大納言長家

こよひをかぎりてあはれと見つる涙しもいつかなる
又廣義なくありて侍りける
大江廣房

たぐひなき聖衆の露とさらに落ちて物の哀れ
猿寺よみ侍りける中に
鴨長明

ともしきぬつねのみならずといひて聖人よ一念を高くのぼれ
前栽ふれさせ給ひしにわかれせ行ひけり
寿成門院

露さえて葉月ゆふべとかるやのしるしの聖人よ秋風ぞふく
長月の頃よみ侍りけるに
藤原俊成朝臣

思ひ入る心の山の陰までも渡らるゝ月の影

月あかき秋二条殿にて後二条院の御代の
事おもひいでゝ
西花門院
雲の上とみし世ハ霧におもひいて昔に似たる月の影
九月十三夜よまかりとゝまりける時よみ侍
ける哥
妙空法師
おさまれる世にあひぬる月はれて雲もてむかしにかへる今宵かな
無常の心を
源高秀
行末とおもふも袖のおもかげつねならぬ花の跡の
世の身悔りけるとふるひて同種の供養
し給ける時枕よりさきつを給けり
式部卿久明親王
今はたゞ我身とゝまるならふ念か梅の花そみをきなき
母のおもひに侍ける比おもひなげきすることのも
とへ申つかはしける　後宇多院宰相典侍
志られふる過しき世の別路ほとそのなきを袖ぬらすとは
老の後成運法印下の三十三年に侍りけると
なき侍とて
法印栄運
なき跡の三十とせあまりみとせまでとふ老のうきをわすれ
枇杷皇太后宮かくれ給ひて後御帳の

うちとなふるこゑくわんいま給けましいはしのせ給ひ
ありけるあやめの草の給はらせとてよめる

江侍従

玉ぬきしあやめの草はありながらよどのはあれん物とやはみし

等持院贈左大臣かくれてのち五月五日
よみ侍ける

権大納言義詮

あやめ草しいはそれみる袖よりかけて何まら涙哉

又のとしの三月つこもりの日常在光院に
てよみ侍ける

性威法師

みし人の去年の今日にこそ別にしことしもけふそなほそかなしき

大納言経信服に侍りける又のとしの中院に
ましける

出羽弁

恋しさやおもひわするゝ人よりは別しとしをへてそまさる

返し

大納言経信

別にし年とはいはすまてつまと袖のこほりはとけすそ絶ぬ

後朱雀院かくれ給て後白河殿にわたらせ
給ひし月日のほとも過て世行はさりとも
御はてに七月七日と人の申けるをきかせ
給て

上東門院

きのふまてもいそうまとぬるかなしくとおもひそこれし七夕のひと

清輔云くれて後のつくりかはりて待けるを
みのゝ江のしるしとてよみ侍ける

廬義云

永き代の為しとこゝに植し松の千とせと共にいはひこそせめ
子はをとくまそてなけきあらは我に待けむとも
ありとへつらけり　祝部成仲

思ひとりふこ道摂と志ての山まこえふ命さへ月かせ
返し　女

君かためいとゝ命のをしきかなさらにあひみむことを思へは
久安百首うたよ　前参議教長

水の面にうつる玉の影をもみゝにさゆるとよそへ哀やみ
月ゆらりて待まつ童子くありくよ佛事いと
なさけうくよつうりまつ

二品法親王慈道

ときませも袖にあふれたるしも涙の露の梅露に
おかれて待けるを後つく同しく人の家の
り

清輔實雅

日数ふる後も今更せさらるつるふはしるし袖のあふ
思ひしらす　已心院前摂政太臣

露の身をちらなさ物と思ふゐぞやそむかれける

夜中虫声　従二位家隆

あの露浅茅かりくとなふすも我身ひとつの秋のむしのね

題しらす　少僧都源伝

樒のおくさまさる命をとつまつその言葉いたつらにまたまん

贈従三位為子身まかり侍し比蝶の夢を

ころあきらけの花よつまて前大納言為定

りとにやつかしける

順阿法師

こ蝶の世はかなさとなふすかなしみかな樒の花

返し

前大納言為定

空蝶はむなしきこともののこりさり消て結ふなき露

ある比法の友乃筆あとつへけるをきてつかはす

とてはかなみうしにうき給まへ

前中納言雅継

歌ふんとくみて被にしくもあはしさくれとさみねのあと

返し

中納言為藤

そきなりすこゑの蓋の給かくいふ下まてむまれ歌の道

正三位成国身まかり侍し比よのの侍けつ

祝部成光

とてもくらの世ふしかふまにふかなとるうの人の跡かさらん

従一位倫子のおもひに侍けるに

中務卿宗尊親王

もろともにこれやとてこそみなそこにうき身をそへて後嵯峨院かくれ給ひて後法性寺の御事

と御覧して　　順徳院御製

君もけふこれしもとうきりみてことにおもひやる世のたとへ

ありし御跡の秋月を御覧して よませ給ける

かなしさも世のわかれにそへてたくひなき空の月のみそふれに

永福門院かくれ給ひける御葬送の

夜より小草津とふ寺に舟よせてこゝまて

けふのみの空にいしき波の音なりけり

おもひしりてよみ侍ける

澄信朝臣

ありけることさへかへるわかれの袖ぬれてこそ

うき世なりけり

新拾遺和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　伊勢

石清水いはぬ思ひはもれてなほあらはれぬらんと人のしるらん

人丸

空よしる人はおもひし白雲の消て物思ふわれならんとは

中納言家持につかはしける　笠女郎

つくま野におふる紫衣にそめいまたきすして色に出にけり

中将のみやすん所によみてつかはしける　円融院御製

おもひあまる煙やみちてなかなかにそらの雲となるらん

寄煙恋といふことを　邦世親王

人しれぬ思ひのこかれ夕煙とひよるより身をこかれつゝ

貞和百首哥たてまつりし時　中園入道前太政大臣

人しれぬなけきつもりにうちそへて猶ふる恋ちはてそかなしき

道助法親王家五十首哥に寄雲恋　従三位行能

夕暮は宮こにちかく引雲のはたてにおもひあまりて

光明峯寺入道前摂政家百首歌によみ侍

恋と　従二位家隆

くるしきやまつ山によはなほとしのゝやふれも今は恋

思ひしらせす　殷富門院大輔

聲をたにきかぬ山をもたのまぬ恋ゆへにまよひ入けり秋そ露けき

光明峯寺入道前摂政家百首歌によみ侍

恋　前中納言定家

甲斐かねの雲にまかひて吹嵐も心の色をみせやはするらむ

百首歌たてまつりし時寄風恋

前大納言実明女

もえつゝ吹ふ風のおとたにもしらぬにもともはなれて

思ひしらせす　読人不知

あはれなり影の夜みつる月草もこゝろにもあらぬものゝめと

文保百首歌たてまつりける時

前大納言経継

月草は花色あせてうつろふとまた人心あらはさき

歌合出恋　聖護院親王

くちはてむ岩にのこるむかしのりはかりにこそよとも

嘉元百首歌たてまつりける時

法印定為

苔深や岩まくらせはき瀬のあみ浦につとむしらへそなき

恋の歌の中に　源氏経卿下

りゆすなよ本の葉ふらむ苔水の庭のかはまれつとも

大蔵卿隆将

我袖よおりとやいかん吉野川なかえてもおつなか瀬の水上

よみ人不知

浅き瀬そ波かゝるらん吉野川ふかきこゝろとおもはずや

延喜十三年亭子院歌合よ恋とてよめる

躬恒

瀬川いかなかれなるらんなと我恋とせく人のなき

題しらず　権中納言実重母

よし更はふちとせん瀬川なかれの末よあふ瀬ありやと

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

山川のなかるゝをせきとめつ思よあまる袖のなみたに

題しらず　平常顕

袖よおつるなみた志て泉打にて巳さき中にむせかへりつゝ

思恋の心を　遊義門院兵衛督

せきかねておつるなりそしらと稲葉ふかはそぬ袖の瀬つを

九条前内大臣家百首歌合に

土御門院小宰相

わすれずよきさらぎのまよそなたに思ふ山路のひて通ふ言の葉かな

忍久恋

兼好法師

しのぶ山又ところにはかもおもひあまれる人もしらじな

平忠恋といふことを

平忠度朝臣

恋しなむ後の世まで思ひ思ふてふ人のうらみもふるさとかな

建仁二年影供歌合に忍恋

前大僧正慈鎮

まつしも卯の花さかれ時なれや袂はほしそかれぬるぞ

皇太后宮大夫俊成女

今はとておもひの山嵐に時そともなく露そこぼるる

恋の歌の中に

西園寺内大臣女

いかにせん思ふかちなるとふからに思ひそてに袖の波と

光明峯寺入道摂政家歌合に寄海恋

正三位知家

うらみわびやしほの海ふかきとわかぬ波のこそまさるな

文保百首歌たてまつりける時

従二位宣子

こゝろをはこひそめけんつらさにやそてにうきなの袖乃波ハ

嘉元百首歌たてまつりける時恋歌

権中納言公雄

せきかねて涙をとゝめてそてふかくちるらん袖のうへそいふかひなと

従二位為子

あはれてもたのまれしなくさめはきゝ袖よりも思ふ涙なりけり

色しらす

常元法師

つれなさてせめよ枕の袖なれやおつる涙のひやかゝらん

正和五年九月十三夜後醍醐院にみこしをと

よませ給ひける時五十首歌めされける時よ月前恋

恋

前大納言為定

いかにして涙つゝまむ影やとる月よ袖のうへよいとゝ

色しらす

平英時

誰故の涙とも人のたつねんに世をなけきにかへて袂と

前参議為嗣

袂より涙かすまさるうき心をしへよとのこゝろこし

寄山恋

法印覚元

夕河の山陰よりおちもみてこの袖のなやましさん

嘉暦二年百首歌たてまつりける時寄名恋

常盤井入道前太政大臣

こゝまではそれみちのくにしのぶみよ秋にかはる秋のむしの音

百首歌たてまつりし時杜恋

権大納言義詮

露はまづ色にやいでんおもふともいはでぞ思ひの森の下草

入道二品親王性助家五十首歌に

法眼源兼

しるべなき思ひの杜の下草におきそふ露はむなしかりけり

文永七年閏九月内裏三首歌に寄菊

久恋

大蔵卿隆博

つゝみこそ袖にも関とめやらん涙は菊の露ならねども

思久恋を

太宰大弐俊定

うつりゆく年をつもりと思ふの人待わかぬたならまし

恋雑物といふことを

花園院御製

いとせめて思ふ中には玉章はおもふばかりもえこそつくさね

思通書恋

入道二品親王尊円

ちかすなよ思ひの森のことの葉のかはらぬいろもみえもこそすれ

たのめても女のりこそつらかりけれ

祭主輔親

思ひ出てこゝろの月を思ふ草葉のかれにつきてそけれ

題しらす　　深養父

年をへてちりのまつりの波はたゝ折つゝぬ人のまたれ

文保百首歌に　　忠房親王

いさよひてつまたなくすゝむ月を思ひきつゝやとやかりせし

題しらす　　平行氏

人しれぬ波の玉江のあしのまにひとりきてこそねをもなかるれ

権律師則祐

わかれしとたに思はぬ人の程なりぬ身をうらみてもなほ思ひやる

大納言師賢

なれまくて袖の波の玉つゝきてもあはしの身をしみえねは

等持院贈左大臣

つねに我くやしきなけきをいつしかとおもひきえむはかなきそ

二品法親王覚助家五十首歌に思

藤原基任

くりかへし思はさらに世を憂さの一人にのこる秋やなからん

弘安百首歌たてまつりけるとき

後西園寺入道前太政大臣

恋しさはよにもれぬる松人の知られぬ身をも人やしれ

寛治二年百首歌たてまつりける時寄鳥恋

山階入道前左大臣

おかりのおかり池のみなかみも月よりやしらん我のみならすけり

寄霧恋といふことを

為道朝臣

いつまてか霧のまかきのへたてにて恋わたるらん人にしられて

恋の歌の中に　禖子内親王

世をそむくなくさめもなくさむとも思ほしあはぬはしらるらん

藤原長秀

いつしかも我のみならぬおもひさへ人の花よりさきにたつらん

忍恋のこゝろを　法眼行胜

うきことをしのふの袖の中にしも人めにあまる涙なりけり

忍逢恋　中宮大夫公宗母

あふまてといつはりなかき人めもるあふよのひまに枝をつゝみける

題しらす　源光明

こえ侘ぬる坂山の関よりもよそになりぬる人そしらるゝ

平重基

うき人の心の関と成そめてこえてもこえぬ逢坂のやま

建長元年五月寄山恋　前大納言為氏

ふしのねやきえはしとふ歎てもなほもえわたる思ひの果そかなしき

寛治百首歌奉りける時寄烟恋

常盤井入道太政大臣

すゝか山ふしのねはらひもやたえぬ煙よもすからふかん

家に五十首哥よませ侍けるに同しく

入道二品親王尊助

冨士の嶺やたえぬ煙の行末も思の外の入かたの月

貞和二年百首哥奉りし時

民部卿為明

峯の松ゆふくれにはかはらねと入やかなしけれ思ふ覧

関白前太政大臣家にて題をさくりて哥よみ侍けるに寄煙恋と

頓阿法師

こふるあひぬかりそ夕煙たつ下もえぬ身のあはれけれともつしかへきにはさへとてこけ
けふへまかりて

小侍従

なひききる我身あさ間のゆふくれにとひよの身の煙哉

百首哥奉りし時寄煙恋

前大納言為定

よの中は契りあさまの夕煙たなひく方もやはらきぬね

恋の哥の中に

慶運法師

神代より煙たえせぬ冨士のねは恋やつもりて山となりけん

権少僧都寛耀

独みる花のちりのつもりてやむかしを庭の山となるらん

人丸

あひ見ぬもいもとなふせんは玉のこゝひも夢にみえもこそすれ

具平親王

夢にたに見えぬをうきとねさめつゝこふらんはかなきまゝに

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

思ひねの夢ならさきに稿とよしても枕によこきゆふ雲

文保百首奉りける時

権中納言公雄

うつゝにはみしやかすかのさとの夢ならはむかしを

百首歌奉りし時寄夢恋

権大納言義経

人めをもしのふへきよはしもとひの夢ならさらし

文保百首奉りける時

前大納言為定

うつゝ人のゐまはおもひてねぬる夜はそむかなさゆふ夢はたのまし

寄夢恋

従二位為経

ゆくとみれ夢のゐちの面影はさらに待まかよひそめなん

前右兵衛督為教

せきそなくとらへ小萩かさなへはゆともろ秋の葉と[illegible]

祝部成宗

旅ねする秋の葉にこそしけれ露猶やゝとゆふさるに空の[illegible]

承久二年土御門院にまゐりける三百六十首

に秋歌増意

前中納言定家

秋のよの露の袖にはつもらでなく〳〵みえぬ葉のいろ

建保五年内裏歌合に冬頌意

後久我太政大臣

こゑ絶ぬ嵐の音も遠ざかりてもみえし夜の葉の通路

八条院高倉

岩こえ秋よ吹くらむこゑさへ絶ぬ峯ともなしむ袖の涙かなれ

文保三年百首歌たてまつりける時

正二位隆教

おしむ秋のつきさへ今はなくなるの小鹿よそふるも物の涙なりけり

歳暮といふこころを

安嘉門院四条

今までとしらぬ身のへての月日さへせきそてつもるかなしさ

前大納言為氏

あふまでとたのめしまゝに年暮て我をもしらず

ゆく月日哉

新拾遺和歌集巻第十二

恋哥二

光明峯寺入道前摂政家の恋十首歌合に
寄糸恋　　前大納言為家
年まてのちきりもまくこと夜ゝのまよひされ糸の恋のみたれし

文保三年百首哥奉りける時
芬陀利花院前関白内大臣
あふことはかた糸によりて玉のをのよわりてそおもひみたるゝ

寛治二年百首哥奉りし時寄玉恋
八条院高倉
こえねてなふそはおくのとれにさきてもつくさ袖の玉

題しらす　　藤原隆祐朝臣
徒に年はふりぬ玉のをもなからへはとも契りやはせし

百首哥奉りし時露恋
入道二品親王法守
玉ゆらの葉末にむすふ露の消ぬへくもふしまてはならぬやさき

貫之家の哥合に
よみ人しらす
秋萩にをく白露の消かへり人を恋しと思ふころかな

十月ばかり小女のもとへつかはさんとてたとみ

よませ給けるに　赤染衛門

秋まての聲へはあさふく風の音身にはしむらん物をこそ思へ

寄霧恋　前大納言良教

我恋は峯の葉よ下まよふ霧なれやたえぬ思ひの消えぬ歎かん

百首歌の中に　式子内親王

わか袖はかりにもひめや秋のあさちの露（おくよ）しふかみ満ぬらむ

堀川院御時奉りける百首歌よ

権大納言公実

うしとのみ人のこゝろを思ふにはそへのまことをたのそらん

寄鏡恋のこゝろを

土御門院御製

ます鏡恋しき人はみえぬかにはかる面影の何うつるらん

寛元百首歌奉りし時

法印定為

わか中はたえし山鳥のます鏡よそにも人の影とやみん

影しらす

権中納言公実女

山鳥のおろの鏡のよそなからも面影にはねはなかるれ

鴨祐夏

いつまてかよそにのみ見てあま雲のへたつる中に恋渡るへき

後京極前関白左大臣

逢まてとたのめしことはけし玉のをはみしかゝりしにかへそ
おしくなるとおもへはとりかへさるゝ
かりきらよつかしけり

伊勢大輔

人志れぬおもひの玉のをたえなはなかにてあはぬ数とほし

題しらす

寿成門院

忘るなよ命かきりと契りし世の契りありとや猶のまた

寛治百首歌奉りける時

宗漆忠

藤壁門院但馬

見んことを人の夢まてとふてこそまたもいふ中にあらさりけり

延喜十三年亭子院歌合によめる

読人しらす

あまより難波の浦をとこし舟のつなてなくとも忘れめや

題しらす

基俊

なにとなく何まれ浦つ汐小舟ちらとも涙かなしき

和泉式部

よさの海あまのしほやくよるかひもとはやくと志らせなん

道暁法師

逢ことの難波のあしのかりそめもえやあふみなん

後深草院少将内侍

志らるゝ身とは思ひしを浦よ舟のみなとにさへ棹は

恋の歌とてよませ給ける

後伏見院御製

あふことも身にはあらぬさへふる波乃よるなみのあふねそふ　うる止

百首歌奉りし時寄藻恋

権中納言時光

人まてうらみもひさしきまん徒よおきつ玉もの身にぞまつて

文保百首歌奉けるに

前大納言為定

いふせんりの舟のゆくとも志らぬよさらて袖の涙

徽安門院一条

あふことは波路ともふ漕舟のゆくへしらぬやうに浦ん哉しらす

前参議為秀女

よる舟のあとはなくて波よ我身こそ浮れる波

恋乃歌の日女のかくへだてらし恋

賀茂成助

恋そふ空のきしきみのつらさんのうらまつには

行くらめ菊よつけておもひよせらし恋

太宰大弐高遠

つれなき人の恋乃まよりちるものはみよ何まつらんと言

さしはりのやまとりきれといふつまなくて
やよ待けりよ世のいふきひとんかいきわりても
此さあり花をこせとりくれいひつへし
けり　基俊
いかにしても此下紐とくるへきひとりなよのもしからんしに
光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合よ
寄常恋　洞院摂政左大臣
峯のこそ我常のちうきとけてあふ我限り世まで
後堀河院民部卿典侍
かりそめにむすひとして下常とも契と杉やなん

思しらす　祖月法師
こへたえそ岩代の結ひ松ちとせあへきんなしねは
猶遊云
枕あてる宿をかへしのしてつきかれは三輪の山へと誰みとほ
行家法師
行かすよるへも寄る橋本河ならと露すきそあは契とそいへる
八条入道内大臣
逢みそ恋を神もうけとるは立かへりつきこひをやみつとまま
三善為連
神あまもなひね中をゆふていかるへきたのとめん

依恋祈身　　前大納言為定

恋しなぬ身ともつらさを祈りつゝ思ひたえねと神やうらみん

百首歌奉りし時寄杜恋　　関白前太政大臣

時雨ふるいくたの杜の神もみち日をへてまさる色に恋つゝ

正和五年九月廿日後醍醐院いまたみこの宮と申ける時十首歌めしけるに見不逢恋　　従二位行尹

恋

時雨行雲はなえまの峯の松みえてつれなき程を思ひしる哉　　従三位為理

逢ことをなくしは遠き浪まそれ見る人なみの跡も絶しなはなし　　権中納言為藤

いりせ山中なる瀬の夢にみえさらぬつらさを頼みたのまん

人のもとへいかにせんといひをくりけるに返しにおくりける

いかにしてこ石を送りけるは　　菅原輔相

あふ事のなきさにひろふ石なれやこれは涙のまさる成らん

題しらす　　前大納言為兼

ゆきまよふかたもしらねはその契まてあひもしらぬ神の御法

藤原為清

おほん桃園よすむ出羽にくたりけるに我かしこにまかりける時

前大納言為世

我中は関よりちかにあらねともなとへたてゝ人の心さへ

女のもとにつかはしける

常盤井入道前太政大臣

うしみても年のみかさぬ鶏のねの関まくにゆる渡とをき

寄関恋といふことをよみ侍る

源藤経

清見かたあふよしなきの関守はわか通路よらをたのまれ

題しらす

清中下長算

関守もえこそまちとめね逢坂をわか通路とおもひけるかな

嘉元百首哥奉りし時

従二位為子

きくもはし誰をとかめん関のあけそ逢坂みちをいそくらむ

題しらす

前大納言隆房

いかにしてひとりの通路も来はかはる関とさなるらん

寄布恋といふことをよませ給ける

伏見院御製

我とてはかなむあひみるの恋のゆへひをつくるしき布細

中納言通房の家の哥合に恋の心を

よみ人しらず

恋しさを忍びきしも逢ひそめてやむ時もなき我心かな

恋の歌の中に　実方朝臣

忘てふ言の葉いそみし偽らぬなき世なりせばいかにうれしからん

小少将

はかなくも露乃情のかけられて命にかへて惜しからぬかな

源頼康

うれしさをたのみし人につれなさの程をしらせて

閑恋といふことを　権大納言義詮

なかなかにへてたのまれぬ世の中のいかにとひても我身なりけん

読しらず　法印良憲

つれなさの限をしらずあはぬ世に命ながくもなほたのまれさ

前大納言為遠

ひたすらに思ひしはてゝも一つに思ひもしらぬ人ならはて

元亨三年八月大覚寺殿にて歌奉りける時人にかはりて恋といふことを

不逢恋　権中納言隆長

年までもむすぼほれぬるさゝがにの世にもくるしき絶えてつれなき

恋歌とよみけると　前大納言公蔭

世をすてゝ我はへたてしむかしさへうれしひとつの契りとや

恋の歌の中に　　　善源法師

むかしおもふ世をしのひてやうき人の心まかせにつきはてぬらん

嘉元百首の歌たてまつりける時不逢恋

前大納言実教

おもひかねうらむる袖の契さへ我心よりおもひたえにき

題しらす　　　俊恵法師

逢まてはいかん命のおしからぬ人ゆへ身をもやつしつるかな

二品法親王性助家五十首歌に

前大納言為氏

恋しなん後の世とてもいかならんいきてつらさは人の心に

二品法親王覚助家五十首歌に不逢恋

藤原基任

つれなさにとまりやかねんことはりの身のはてにはいまも命を

恋の歌の中に　　　金光院入道前右大臣

あひおもはゝかはらてつらきをせめてなと袖のみかはく思ひなるらむ

法印定巡

恨みこそりともなくたのむ人のつれなきかなしき中の契なれ

定恵法師

逢ことはいつもそれなれ我命人の心にまかせてし

三善信方

とまりねもしられぬ月のかけうつるせきてもとまるふかきわかれ

殷富門院大輔

なかふしみてそいさしられ月といふも渡るらん らめ

千五百番歌合

寂蓮法師

伊勢の海乃しらせよあひし濱荻のかれふきさふにしほし かつらん

建長二年鳥羽殿にて寄水恋を

冷泉前太政大臣

せきとめむ山井の水の薄にふかき袂をしられしまて
もしらす

永福門院

人心あさくなりゆく思ひ川きせふさえぬるとはかりし

藤原行清朝臣

人言のしけきにぬれし思ひ川なかれて末のたのみともなし

百首歌よみ侍りし時寄橋恋

按察使実継

年をへてこひわたる身のたえさとおもへ宇治乃橋守

寄河恋

源頼康

おもひしる宇治乃河おさしつむ身のうれ舟をよるへおかや と

名所歌の中に

大蔵卿有家

りみ川への心れいかな舟も志りしそれとこさらハあそめまん
ぢしらす　式乾門院御匣

あな上乃あやて消るハ恋も川なかれて猶そかハきまし
前参議為秀

そこ井なき淵となりても涙川下ふのさゝきやハせぬ
山本入道前太政大臣

逢瀬なき涙の川乃月をつみて流さき志よ柊やそ（かん）
権大僧都伝慰

いるまハ人まんを深川の滝ね瀬まも袖ぬらすらん
恋しけり女をいひそりそにて下野守

よし譯よ身をねとこそてもひつらけり
前中納言匡房

恨みし宮の八幡よあらぬ月にこゝれしともそ恋乃苦
恋乃あハれ中に　平忠度朝臣

うれ世そハ歎きなからしもしらてそ恋に我身やたえん（かへん）
清原村基

ほてきりそ命いつとも頼まれんあふまても恋ハ志ぬとも
伴周清

逢ことにかへぬ命そよそならて中々長き契りなりけれ
小侍従

月みさへとひとしらぬ袖なれやなみだの露のかはくまもなき
寶治百首哥奉りける時寄枕恋
鷹司院帥
こゝろへの枕もうとく成はてゝふしてもねられぬ夜のつもるを
恋しらず
源兼澄
恋しらぬ袖乃涙とそのまゝにかはきてつらしくよなき恋
源宗範
逢とみし夢こそさ夜もしるまよはぬ袖よりこそてかける袂
百首哥奉りし時寄夢恋
藤原雅冬朝臣

独ぬる涙の床乃ねまもなく夜ゝに都をしたひてやそらん
恋哥の中に
鷹司院按察
いて我をなれゆかむ月影よもうちなかめてもかなしからん
後醍醐院御製
なをつらくなくさむやとて詠れハ月乃みそ袖のぬれまさる
かなしき袖哉

新拾遺和歌集巻第十三

恋歌三

百首歌中に　土御門院御製

わかれんなをいとひて待宵の松のあらしまてものうきそれ

新少将

まつ人を頼むよひの空蝉乃羽うすきやかてもつまなき世

前大納言為家

たのむやまた夢乃かよひ世としてたのめしまゝの暮をまつらん

亀山殿十首歌に忍待恋　土御門入道前内大臣

ゆふくれとひとつにたのむ人乃きくさへ今日そ過なん

恋乃歌乃中に　前大僧正道玄

わすれしはまてとたのむるしはしの程のまはおなし暮そなれ

秋恋のこゝろを　後九条前内大臣

秋乃雨に桐乃葉おつる夕暮を思ひなれてそ待にまさるれ

光明峯寺入道前摂政家乃十首歌合に

寄庭恋　藤原信実朝臣

徒にかせきもりの小庭は夏とたのめしてかよへとも

夜恋を　惟宗光吉朝臣

なけきわひおもふともいはれしてせきもりの夜半にきえん

題しらす　源貞世

侘ぬまハこゝろも猶かゝらぬにみえつる庵やしほそめ

寿る衣ころもふるすと

権大納言長雅

これも又まことやいはん浦の衣へのこ葦鶴のたのこゝろよ

嘉元百首歌奉りし時小絡恋

後照念院関白太政大臣

よし更ハまたしとおもふ夕暮も我心さへ身のこゝろけ遣

恋の心を

大江広秀

いつはりとおもひも海山河のへたつさへ瀬によらぬ暮とさへ

ますらん

そはよりをひけるへ人のこれ又人のむねに

なかくへしとさへていふをとつらてかさて

やみにけり

馬内侍

大かた人のかりはぬるからにやさしき松の我世ふるをまつらん

百首歌奉りしとき

入道二品親王法守

結ひ道し夕暮とにさそふかのあとしらくものいとそらゝ

厳安門院一条

面のほとも又さらへもなれ猫をかぬとふかふかるそ松のかせ

忍待恋

権大納言宣明

この筆をとにかくにて思ひ出んひともみれ歳の松せ

影しらす　　賀茂雅久

なくさめよの葉にの寄別て移むつり乃筆にぞ

菅原為知朝臣

紹の乃筆をも見えてまうれかり身に寄じに多く重なる

従二位藤子

紹のとよみれてて移むとも堅くぬ筆をかふれとも

大江忠章

まつ人にとひもいさや入日さしにきよく雲の筆の色

臨終發願意乃心を

弾正尹邦省親王

この筆にあらかる信ぬかねり堅も志して移しまう

体見徒ようまる二十余年余に

従二位為子

身のゆくへは紹よりにかこそれをわうかへ信ゆかに忠めてまゐれ

忠なる合よ意ろ

後西園寺入道前太政大臣

一ふし知りやせけの紹乃伝よかはぬ中にへなりせと

文保二年百首奉りけるとき

津守國冬

花ゆゑに遠山てらの梢まてのこりくなき契りかな

題しらす　後醍醐院女蔵人万代

花の契りなからましとも身のほとてやさらにハこの身をなにせん

待恋のこゝろを　入道親王尊道

くりかへしむかしもかくは花にこひしまれ人をまちりせは

世のうきをかりの山吹よつまてや待けり

よみ人しらす

身のうきをしられ花とてしとも心にまかせぬ我か家

返し

いまそしるわか心の花ゆゑになかきよにもなき

浄妙寺関白前右大臣

題しらす　よみ人しらす

世中にたえて花なかりせはなにをか春のおもひ出にせん

連日待恋といふことを　源孝綱

花遠やさくとよの花よりほかにてうちぬるてろなからん

嘉元百首哥たてまつりしとき　権中納言為藤

ちりさくて花ふところ花の契りし人いまさいひ出しつゝめ

題しらす　法印浄弁

花の契りかなしきなへのつゝ人もなかれひまやちりなん

中務卿宗尊親王

こゝまてもなくさむ物と偽のなき世ならはいかゝ悲しからん

嘉元百首歌たてまつりけるに

贈従三位為子

ちきれはとたのむも遠き偽のなき夕暮にいかゝまたれん

待恋の心をよみ侍ける

康仁王

貴来はく待あはせとてこぬ人の偽の数つもる夕暮

恋の心を

大蔵卿隆博

いまそしる来ぬ夜かさねて憑てもさてすくしける偽のほと

如雄法師

偽のかさなる数のつもりより夕暮をはへしたのみはてつる

権律師則祐

偽と思ひてたのむ夕暮を我待程にはかなかるらん

題しらす

前中納言基成

はらふめにいとゝ乱るゝ夕暮の袖よりはかなきなみたなり

瑒子内親王

さりともと待夕暮のしたはれてはかなくすゝみたのむ心やみらん

恋歌の中に

前大納言忠季

夢のあてもいつかはたのまんよのなかの遠き夜まてといひし契を

花園院御製

なかつ世へまもりともつきせぬ道に通はんとなして

前中納言為相

倫とききり侍りしとたのむ旅の衣をかけて絶なかん

前大納言為世家にて十首哥よみ侍りしに

深秋待恋を

頓阿法師

定めなきとしらんとこには宿たにならぬ秋もしらて寄の契

嘉元百首哥奉りける時待恋

昭慶門院一条

まちしとはたのむ物からぬくもりつきやなかの人かるらん

貞和百首哥めしけるに忍恋のこゝろを

法皇御製

こまひきへむなしくぬくる灯のきえなておもとほりかへれは

関白前太政大臣

ぬくるまて頼めたのめしよしそこいねとらんも待はいなん

寄露恋を

左衛門院御製

よひのまは出てそへんとたのまつ袖の露そやさしき

寄月恋

弾正尹邦省親王

うれへの面影そへてたのむよのもこぬよも独月をみる哉

菅原在兼朝臣

つまなきの限をそこたつねつゝこゑよる月乃有明の空

月前待恋といふことを

前中納言為定

こよひ又むなしき袖によふけぬと涙にやとる月を知らん

左兵衛督基氏

まちわひてたちけさへめのやとしらよ影やとるこそ月のまゝ

大納言経実母

待わひてさてもねぬよのさよ更ぬ月かけにつきさらへて月をみる

題しらず

是法法師

君まつとねぬよなよなの袖もしのふ秋よ山の月

源信武

偽とおもひもしらすまちつるや心にかゝる契りなるらん

文保百首歌たてまつりける時

前中納言雅孝

来てはかる恨をまてる偽におもひなしてやさらもなからん

寄水鶏恋と

源師光

枕のしたをたゝく水鶏をそれともおとろかぬまてとはぬ君かな

題しらず

高階重直

枕のみしたひてこよひをゆめよりさめつるといふそかひはなき

大蔵卿長経

蔦まり入江の草のつゆてなれはりやまさにふくらん

源光行

身のあつこゑよそにもきこえすはかなやはしき秋のまま

大中臣卿廣朝臣

たのめこしこゑ秋の数はつりまさるまにとはぬふるさと

菅家万葉云　読人不知

思ひ清もかくてもみくさあつまるそ俤さ独ありよれ

読しらす　昌義法師

偽となかなかかとらん思ふにもとしぬそ人の為とかけけ

法印澄潤

立かへりたのめ偽をつりふくやたわりいまつらて

津守國夏

せめて身て宮にのそまされなからそこすはれぬる世まし

能誉法師

なのめてもこゑこれ渡の沖津風たゆみなはされ松吹らん

恋ある中に　忠見

逢みしとなからは道も君もとらんそて待まも定めなれ

惟宗忠貞

夢としも思ひもよらぬ契かやとのゆるみきころなき秋

前関白左大臣近衛家基卿ふかく寄馬恋

権少僧都寛耀

うきめのみあつかる波のおさまらぬせにふかきおもひになみたなる
をもしらす よそ人そしる

こきまぜしなかなかなりぬ旅枕むすふ一夜の夢の契りは

百首歌奉りし時寄枕恋

関白前太政大臣

うき逢ふに一夜の夢のかさね枕人しらぬにとひもやすらむ

嘉元百首歌めされし次に初逢恋

後宇多院御製

忘れなはくやしかるへき契かな命そ人のなさけなりける

絶逢恋といへることを

贈従三位為子

はすらえさりしその契りとや命つまるへくたのまさらなん

忍逢恋といふことをよみ侍ける

権少僧都経賢

うくてしもあひ見しほとの契とやあふよを人の惜まさるらん

貞和二年百首歌奉りし時

民部卿為明

相坂の木の下陰のいはし水むすひてもむすふ契りともかな

稀逢恋を

信実朝臣

なみのつゆおもふは掃ふか袂には思ひけすとても猶そかなしき

従三位宣子

さ遊のちりかくしにかゝぬよみつりまつ数をおもひおもひて

民部卿為明家にて人々よみ侍りし小童恋を

性宗法師

うらむへきよのそなれ萬らへしらすの人のつらさをおもひしれとて

思ひしらす

藤原基世女

まねこ人の涙をおもへそひく逢坂に袖ぬれまさり行

永仁六年亀山殿五首歌合に寄世来不留

恋のこゝろを

正二位隆教

人のつらさをもしりすくせて涙なみたやまさへ

別恋を

後光明照院前関白左大臣

帰るさの道の芝露と契りしをおもひのこさぬ別かな

源時秀

おもひ出る道の芝露のこほれしくに惜きまさるなみたを

後朝恋といふことをよみ侍りける

前大納言為家

そのまゝにさても消なて白露のおきてそわかるさ芝草

恋の歌の中に

従二位行忠

なくさむる人のつらきのまゝにさてもわかるゝ袂かな

藤原冬長

さぬくの別とおもふ手枕に涙をそへてなにやなくらん

正三位成国

けしきさく鳥のねつくりおつけゝり人とわかれぬ寂くれ

右兵衛督基氏

うつゝとも夢ともわかすなれなれしにあかてわかるゝしのゝめの空

寄夢恋を

入道二品親王尊胤

天の戸のあくるとしらて別路をとゝむるなれはよそにこそつらけれ

百首歌たてまつりし時寄関恋

権大納言義詮

逢坂の関に付てもかなよみちこえてゆくへき世をちかふなねよ

恋歌の中に　藤原盛法

なかのつらきおもひみな夢とはなかゆきてはこれも別とおもやしなん

稀恋を　前参議為秀

寝をまたぬ里の月をも枕にて出る袖のなみたに

たゝ袂よりいつるなりけり

藤原仲文

わかれ路のはてもしらぬ暁はいとゝ露とおきさらなれ

後朝恋の心を　皇太后宮大夫俊成

人をふりて契りかけとも松川の袂の床はおきそふれ

千五百番哥合に

醍醐入道前太政大臣

あひそめし秋をもまたぬきぬ〳〵はしら露のおきてまて袖絶なむ

かくひける人の七月八日に哥よみて相待して

ゆりわかつとして　前参議忠

七夕のけさの別し袖よりもわくまにけさそ絶ゆけ

後醍醐院つまくみこの家にまゐらせ給

十首哥めしけるに恨別恋

従二位為理

わか恋さへ中にありつゝ恋しみてておき別つゝ

うしむらとまてふもと遠くまて鐘のおときゝよ鳥の

題しらす　祝部成藤

よみ人しらす

うらめしき鳥のねをこそまて又鳥の声をもおきらし

暁別恋の心を　前中納言基隆

面影をのこしてもや有明の月もる人のなきまかん

題しらす　清原勝経

三更過て今いとひし夜くの面影そ有明の月

大江頼重

今は又鳥のねかりそ形見にて有明の月と涙まそかな

嘉元百首哥に　万秋門院

うき物と思ひ別るゝ面影によみやはまたるゝ衣々の空

恋哥の中に　後宇多院御製

忘るなと今一こといひすてゝまたあかぬ別と限りとぞなく

従三位為継

月をまてしはしも人のいひなぐさ恋さへとおもふとのこゝろん

弘安元年百首哥奉りける時

花山院前内大臣

手枕のつり香移りて袖しんまくらこゝるゝ添となり

髪ふし知

能恒

物おもへばまつとはいひし乱れつゝ我心のみけれぬ物かは

藤原兼清朝臣

いつまでか忘れても常になかれてん人をとけぬ契りなりけん

進子内親王

たましひの契忘るゝ下紐の又うちとくる人ありとしも

光明峯寺入道前摂政家の恋十首哥合

に寄帯恋　前中納言定家

いかにせん人はつまなる下紐の別しなかにめぐりあはずは

恋哥中に

俊恵法師

逢そめて忘るゝ程に数ならて哀契の果となりせは

契経年恋といふことを

従二位雅宗

浅からぬ契りみせけん月のつもりにけふまで人を忘れぬ

百首歌たてまつりし時寄恋

藤原行輔朝臣

行末をいそくしるしに梓弓ひきもたえせぬ契

題しらず

真昭法師

行末をたのめても猶かねてそおもふしらぬ命のあはれなりけれ

前参議為秀女

よのつねを定めなき世とともに契りまでの命ともかな

法印実明

契りおくその末をもみるへきは恋にはかなきいのちなりけり

契行末恋を

藤原経清朝臣

あはれしらぬ身はなからへめ行末を契るへき人のはてもかなしと

契経恋といふことを

前大納言為定

うちはへ契りしこともなほさりにそれのみありし世にや

恋の心を

左兵衛督直義

契りおきしまことはかれとも忘れぬへきことのはひとつ

偽恋といふことを

深守法親王

ちかくて身のむくひをたのむとやうき名もあら世なれん

花園院御製

あかし世の契りよせあて夢かりしひねもすに
恋しきまゝ枕を

新拾遺和歌集巻第十四

恋歌四

恋の歌の中に　皇太后宮大夫俊成

うつゝにはさひしかりしを夢とこそいふかひみえつゝ夢路なりけん

入道二品親王尊助家五十首歌に寄枕
恋　前中納言定家

思ひあまり契りもかれしもみえし袖の涙の枕よ夜はいかにふる
き

ゆめしらす　藻壁門院少将

ひとついに秋もよくとちたりそてにみをはなれぬ夢路なりけん

花園院御製

うしとみし一夜の夢のなかりせはさらぬおもひとそしく

寄夢恋　大納言師賢

あふことをまたぬ契のはかなさにたのみもかはる夢のおもかけ

性威法師

烏羽玉の夢かはかりの逢ことをさそひ一夜てやみぬるかなに恋しといふそと

前中納言資平

うきなからそれとはかりに三輪の山心にかゝる夢のかよひ路

後西園寺入道前太政大臣家にて三十首歌よみ侍し中に寄山恋　権中納言為藤

うき身またこえて逢坂の山とてもつらき雲とぬけまと思しらす

権中納言公経女

こえてしもくやしかりける逢坂は雲路をなにゆきかよひけん

人丸

いもか身もいはとおもひし奥山は岩ね苔おひて久しきおもを

中納言家持まつりける

坂上大嬢

あふことにくいはなくともわかさかれ坂せの山の坂をとはる人たれ

返し

中納言家持

のちせ山坂もあれへとおもふそこゝろあつさかへとはすてとも恋

中納言兼輔にあひそめけるはいはまさ
下らうに侍りけれは女はいかなるにやありけん
なにとも宮仕よりはまさりてつらきおもひはさ
りけれはよめる　三条右大臣女
身にあまるほどのくゆるにはおもひしを独は身にあまりてねまさりけり

遇不逢恋　平政村朝臣
あそてら恋を命となくさめし今はなかなか命ぞをしき

題しらず　康資王母
はかなさに逢ふことにして我恋をとふにつけてぞなれ
恋のはてこそ中小

伏見院御製
なかなかに又あふ契ありとても逢しなからの世をはしのはし
絶えし人のあらそふ又いかなとせらるる

小　馬内侍
君ことはわするる人のつらさには我は心をおくれなまし

題しらず　大納言経実母
はかられし人の心のつらさをもしらぬまこそはたのまれつ

後宇多院宰相典侍歌合に絶恋
津守国夏
身のまゝならぬ中とはしりてそいひしかと身は一夜とはおもひやせ

恋の哥の中に　前関白太政大臣 兼実

うきなからもちりすそたのむ佛をとこちてあひみんへなれは

後法性寺入道関白家百首哥に

皇嘉門院別当

つれなさをうらみし袖もぬれにけり波のしたにやかりやせん

関白前太政大臣家にて恋といへる心をよみ

侍りけるに寄夜恋　前参議為秀

このねぬる夜につれて浮人の心もしらてまつほとそ経る

文保百首哥奉りし時

中宮大夫公宗母

よしさらは思ふか程はいのりせよあはれ世にあらは中に契れは

契恋を　権大納言義詮

世をかけて契りしまてはなかりしを今はいかにとすゑそかは

題しらす　式部卿恒明親王

逢ことは思ひたゆともおもかけを夢にあはれとおもひいてゝや

法眼聖兼

頼めしも世はつきぬとも契りても又あらまても思ひあまえき

寄雲恋の心を　是屋入道前摂政左大臣

あひそめしそのかみ中におもひ雲あかなくとあはれとはしのはん

貞治二年百首哥奉りける時同心を

後鳥羽院下野

なかめやるそらにみえつる雲とのみ消はてゝそ消てしらるゝ

信実朝臣

おちくちのはなよりうへやうつろへる雲のいろさへさためぬ

都しらす

法性寺入道前関白太政大臣

白菊もうつろひはてゝ人の心かはりとおもひなれなん

百首歌奉りし時　枯野

徳大寺前内大臣

秋かひの枯野になれはそらにいろかはりゆく中にて

いつのおもかけの灌佛の御ゆかの松よ

鶴のたてりけるをきゝてよませ給て奉し

ふるさとの中なるは松の木に鶴そ井に

けるとおもひてよめるとそいひけるに

待賢門院堀川

鶴のゐる松とてなれしたのもしさ今は梢に波もこえなん

かん

百首歌の中に寄鶴恋

進子内親王

よかるゝ下のこゝろひとつさすは波の底にやなれりとも

右兵衛督為遠

うのむそよみかのきをとも深きて下れるひの音そね

汁を

寄鳥恋　　源兼氏朝臣

鴛へだつれど池水のあさせにはふかきこゝろのへだつかはひさん
思ひはうきのなかにしづむとも雲えあかりなれ

清雅公

小山田の縄代水のいかにならむかくてはいかゞえんのすゑ
恋のみなれ中に　よみ人しらず

まよひけるみをもおもふのやもと川の底にしづむとも恋
（まゝらん）

藤原公時朝臣

つれなさはいかなる世にかあふせをもん山下水のあさき契りは

亀山殿千首歌に逢不会恋

中納言為藤

吉河の岩まにかくれ山水のよにはうき世にふるものかん

文保三年百首歌たてまつりけるとき

几帳の中に清水のしたにむすびとそかりやるらん

光明峯寺入道前摂政家の恋十首歌合に

寄鏡恋　　前中納言定家

行水の花は鏡のかげとしもうつらぬ色やうつりやせさん

百首歌奉りし時同心を

前大僧正覚俊

うつりもそつらきますみ鏡山へけとなかるらん

題しらす　人丸

ます鏡見れはいとゝあひみまくほしき心やまさりゆくらん

色見えてうつろふものは世中の人の心の花にそありける

小町

よみ人しらす

紀の国のあくらの浜の忘貝我はわすれし年はふるとも

建長元年五首哥に寄海恋

従二位行家

つれなさのすまの海風なほつらく我袂には今そなれぬる

題しらす　二条院讃岐

いかなれは涙の雨はひまなくてあふせまれなる川の瀬ゝかな

法印定為

瀬ゝ川むすふみなかみさ月世よこえてもある道

百首哥奉りし時寄枕恋

中園入道前太政大臣

なるせ川又あひみんとなかめてしなかすやいつまてそてはぬれ

恋の哥の中に　実方朝臣

わかこひやくめちの橋も中たえて渡らんかたもなくそかなしき

寄橋恋

源和義朝臣

岩橋のよるのちきりは中とたえてつらきに契あかす月はうらもまれ

題しらす　　源基平

今はとて忍ひし道も面影のかはらぬかけに茂りぬらん
　　　　権中納言実重母

ねぬる夜はおもふところも落はてゝいやはかなる契なるらん
　　　　前大納言為氏

思出てんよひとつれなき恋のはてしも世をうしとおもふ契りは
　　百首歌の中に恋の心を
　　　　月花門院

はかなくも我ことはりもつらからぬ思ひをかくて人をこふらん
　　恋歌の中に
　　　　今出河院近衛

忘もえぬ我心ようつれなき人の契りに
　　　　[illegible]前内大臣

忍ひわふる昔まてやはつらからぬ世にまた人を恋わたるらん
　　　　平親清女

いかにしてこゝろ一とふ人のこゝろも我かなしさもゆるなるらん
　　　　行蓮法師

みとせぬる夢路はさめぬ世につれなきつらさに我とくらへて
　　寄夢恋
　　　　大蔵卿行宗

あふとみる夢ともむなしく覚ぬれはゆきさかりつる文なかりけり
　　　　源和氏

思ねよしのしあくれむ夜そらゆるさぬ秋風の契

貞和二年七月七日仙洞にて三首歌講し
まつりけるに逢不会恋といふことを

按察使実継

やそたひと首くりに如あたにまちこし我夢の通路
悲しらす

藤原政光

いかにせんうつゝに夢路もあやまたぬおもひねかなよに逢夜ありけん

正治二年百首歌奉けるに

惟明親王

あふとみし夢よ嬉しに床の上に洞つりそうつなりけり

百首歌めされし次に寄枕恋

御製

志らしきみの曉とさりとも我よふつまれ枕かはせ
恋わかよ

式乾門院御匣

思ひしと思ふも我のつらさをやさしくやへの夢通ひけん

過不会恋のこゝろを

前大納言為氏

今はたゝおもひ絶ゆへしさりて契しもとさりて言葉そつ

絶不逢恋

前大納言為世

しらすや絶よしまゝ見つゝつれなくみえしれる夢あはん逢

忘恋を　　源高秀

ちかくもとおもひつゝやはたのむかなわすらるゝみのなからさに

伏見院に三十首奉りけるに

永福門院内侍

いかにして面影は中々にわすれんとおもふにまさりてそふさ

百首奉りし時寄鐘恋

関白前左大臣

あはれ世に又たくひなき入あひのこゑに揺まさりて

まれにたにこひしをいまはむかしといとふ暁の鐘の音そうく

藤原為重朝臣

独ぬる寝覚の鐘はきこえけり秋よ又契りかねてそ

家に百首歌よみ侍けるに

洞院摂政左大臣

なれしよの逢しおもひやしる又は移ろふ人の心の秋風

思しらす

源仲教

いつまてか逢とさへられおもへと夢の逢瀬も中にしらぬそん

前参議定宗

たのみこし人の心は秋風にかはる面影にふかく契りかね

寄草恋といふことをよみ侍ける

権僧正果守

浅茅原わくとも露に秋風のいかなる色に吹かはるらん

洞院摂政家百首に寄逢不会恋を

正三位知家

かはりにし里はふりにし秋風は人の心のおきまよふとも

あるしらんを

亀山院御製

さひしさに物思ふなる夕暮と月はいつとき秋風ぞふく

平貞文絶て後初ておもひける露のころ

ありとやいひけるころにつかはしける

閑院

白露のおきゐし誰とかもひつらん我はきてもおもはすいそのみそ

恋歌の中に

前中納言季雄

忍ふれは只まさに袖つゝむ月のみとも知られはかの面影ぞさき

寄月恋

前内大臣

村雲のかゝり月と君わすかとも恋ふしくみえぬ物から

栄子内親王

山階入道前左大臣家十首歌に寄秋

月恋

権中納言公雄

かのつゝとひもそてはこほりて契し夜の月やみるらん

月とみぬ面影はかりさやかにて月の宿れる我涙かな

影しらす

寿暁法師

いかなるまハありもいかなるまぬ西新の月ふそひあつく忘しかん
月ありけるおりこの文をとりあつめてやるとて
よみつとて　江侍従
見るまゝにおつる涙の玉章はやるかたこそかなしかりけり
文やる女はいかにかきたりけんあまりてひたする
せさりけれハ居りつゝ文をとゝにせさひ
やつとありきれからやさしかりしハとられなん
それとて歌こせさりけれハよみてやりける
貫之
見る人も我もなきみて玉章ハ焼てたに

題しらず　式部卿宮
玉とのみおきゐるハゆらし白露ハ風まつ程の世の人にこそありけれ
光明峯寺入道摂政家百首歌よみ侍けるに　前中納言定家
いかにせん浦のはつ嶋はつかなるうつゝの後ハ夢をたにみす
寄舟恋　藻壁門院但馬
あま小舟我をたのめてみしまえの浦よりをちにこきはなれ行て
寄海恋　前参議雅宣
わたつみのそこふかきおもひにとしへまさりて沈つみつゝあるやと
題しらず　源貞世

かよひ風ふきゝらしけむさゝ竹のよやそへ人の露さへさむなり

前大納言為家

うちわひの庭かけの霜ふりぬとも色はかはらし

寄衣恋と

藤原為量卿

何に衣かけてへていとゝかわかぬ袖の涙なりけり

おもしんを

昭覚法師

月草にうつれる衣の色よりもうつゝやまされんとそ見る

恋哥の中に

己心院前摂政左大臣

しられしはたえしとおもはぬ衣とや契りし中の袖とそぬれん

遊義門院

うきみてもあはれは中に何よ衣てをつゝみしつ成よきん

文保二年百首哥奉りける時

前参議為実

ねさそふ嵐の山高み独寝よなかれてその中に契りは

十首哥合に忍恋

後鳥羽院御製

契りふみしまてそおもふ山鳥の長きのかゝ尾の
なかきつらさに